ふくいミュージアム

1982．7．1
No. 2

福井県立博物館建設準備室

～展示実施設計まとまる～

博物館建築の現況

県立博物館の開設準備にあたって

福井県立博物館建設準備委員会会長
塚　野　善　蔵

いよいよ県立博物館は、昭和59年春開館を目標に去る３月着工、来秋には近代的な装いをもって幾久公園の一角にその姿を見せる運びとなった。

建設準備委員会は昭和54年11月発足以来、県立博物館の基本構想を策定し、県の提案する協議事項につき慎重に協議を重ねることになった。去る５月には、開館までの建設スケジュール・詳細な展示構成・展示映像内容・展示デザインシステムなどの重要事項につきほぼ了承した。県教育委員会の文化課におかれた県立博物館準備室では、少数の学芸員の並々ならぬ努力・精進によって、考古・歴史・民俗・産業そしてこれらを生み育てた背景である自然風土の諸分野にわたって資料の収集、これに基づく常設展示の内容につき、足らざるところは今後の課題とし、現在における最善のものとしてほぼ成案を得たのである。各分野の展示内容について中核となるべき資料はなお十分とはいえない。また若狭地方の資料は少ないように思われる。ここに改めて資料の収集に県民各位のなお一層のご理解とご協力を賜わりたい。当分足らざるところは若き学芸員諸君の創意工夫により、今後十分期待できる含みをもった常設展示になるよう切に望みたい。そして子供達から大人まで学ぶことのできる博物館になることを期待したいものである。ここで博物館の運営について一言ふれてみたい。

福井市には伝統のある郷土自然科学博物館、郷土歴史博物館があり、鯖江市、三国町などには郷土資料館がある。また県関係としては、誇るべき朝倉氏遺跡とその資料館、小浜市には有名な鳥浜貝塚の出土品を含む若狭歴史民俗資料館がある。県立博物館には、県の内外に対し中心的役割を果たすべき使命がある。これらの関係機関との共存共栄を図りつつ、関係機関のご理解、ご協力を得て、資料の交流、学芸員の専門的研究の連絡、交流そして研究紀要の刊行など、福井県文化の相乗的振興に資し、県民の誇り得る県立博物館に成長してほしいと念願する。特に、次代をになう少年達には体験学習室の適切な活用、見学会、映写会あるいは講演会などを通じ、学ぶのほかに親しみのある、愛される博物館として、先人の文化遺産に喜びを持って触れさせるように配慮してほしい。

最後に知事さんはじめ教育長さんに望みたい。県立美術館の新設、県立図書館の拡充、そして置県百年記念事業として県立博物館の創設、「文化のふるさとづくり」の一環として誠に結構な構想である。県民の期待も大きい。私達建設準備委員会の責任は重い。県教育委員会に協力し、親しむ・学ぶ・誇り高い県立博物館をめざし、県民各位の付託に答えたい。県立博物館の充実には相当長期を要する。充実、発展のため物心両面にわたって格段の配慮をお願いしたいところである。

昭和６年、京都帝国大学理学部地質鉱物学科卒業。昭和28年より昭和48年まで福井大学教授を務められ、その間同大学教育学部長、学長事務取扱の要職を歴任された。
現在　福井大学名誉教授

建築工事スタート

（県教育長による刈り初めの儀）

昭和57年4月2日、福井市大宮２丁目の博物館敷地において、県立博物館起工式が行なわれました。

建物は、緑に囲まれた博物館というイメージを強調した鉄筋コンクリート造り、地上２階地下１階建で、建築面積約 4,300㎡、延床面積約 9,000㎡です。

基本設計は公開コンペ形式で実施され、佐藤武夫設計事務所の作品が当選。同事務所によって昭和56年12月に実施設計がまとめられました。

建築工事費約25億円を投入し、昭和58年秋の完成をめざしています。

博物館構想から建築工事着工まで

51～52　「福井の文化を語る会」延６回開催。博物館構想が話題となった。

53．3　第三次福井県長期構想で、博物館等の建設を構想。

54．1．20　調査研究委員会を設置。
（博物館の基本理念・立地等について意見を求める。）

2．2　第１回調査研究委員会。

3．30　第２回　〃

7．17　第３回　〃

9．6　第４回　〃
（「博物館の基本的事項に関する意見書」を答申。同委員会解散。）

11．6　建設準備委員会を設置。
（博物館の建設に関し、指導・助言を求める。）

11．13　第１回建設準備委員会。

55．1．22　第２回　〃

3．26　第３回　〃

4．1　県教育庁文化課内に博物館建設準備係を設置。

5．27　第４回建設準備委員会。

6．12　資料調査委員を委嘱。
（資料の調査・収集について協力を求める。）

6．27　第５回建設準備委員会。

55．8．7　第６回建設準備委員会。

55．8．13　資料調査委員打ち合わせ会。

55．9．　基本構想を策定。
（博物館の目的、性格、事業等についてその大筋を決定。）

55．10．22　資料調査委員打ち合わせ会。

56．2．　建築基本設計（コンペ）に着手。

5．16　資料調査委員打ち合わせ会。

5．19　第７回建設準備委員会。

5．　建築基本設計（コンペ）が完了。

56．7．　建築実施設計に着手。
展示基本設計に着手。

56．9．11　第８回建設準備委員会。

56．10　展示基本設計が完了。
（常設展示の大綱がまとまる。）

56．11．20　第９回建設準備委員会。

56．12　建築実施設計が完了。

57．2．4　第10回建設準備委員会。

57．1　展示実施設計に着手。

57．3．20　建築工事着工。

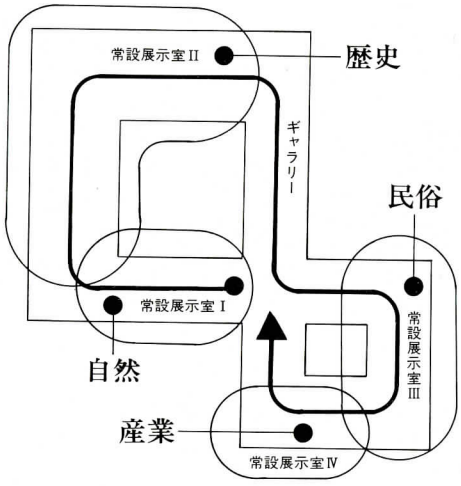
展示計画大きく前進　～実施設計まとまる～

基本的な展示計画が昨年10月にまとまり、その後設計業者の「トータルメディア開発研究所」と検討を重ねてきましたが、このたび、より具体的な内容の展示実施設計ができあがりました。

展示の中では、観覧される方々にわかりやすく理解していただけるよう、主に次の点に配慮しました。

1．自然の変化や歴史の流れを理解していただくために、観覧者の動きを考えた上で、展示空間を大きく拡げました。
2．興味を一層深めるために、各コーナーごとに大型の実物や模型を置きました。
3．より多くの資料を見ていただくために、簡単に展示替えができるよう、ゆとりをもたせました。

次に、各分野ごとに展示の概要を示します。



～自　　然～

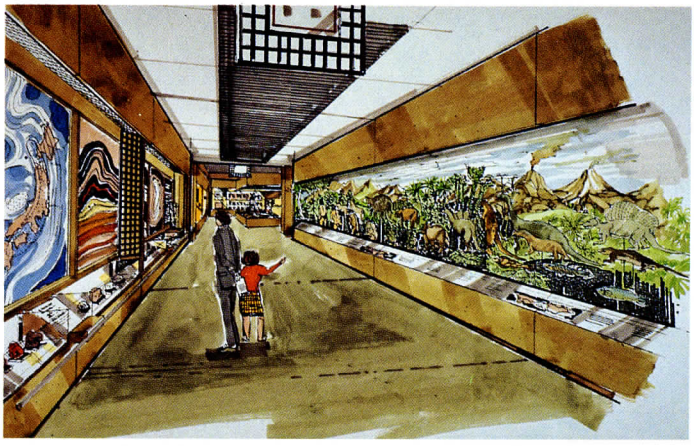
ふるさとの大地

1　福井県地質立体模型
2　福井県の位置と動植物

ここは、博物館の玄関とも言える展示ホールの展示です。常設展示の導入となります。そこで、県土の現在の大自然を大きくとらえます。

地質立体模型は縮尺５万分の１で、県土の地形をとらえるとともにその地質の構成をわかりやすく表現します。また、福井県の位置は人工衛星の写真で示し、美しい動植物達の姿や学術的価値の高い天然記念物を写真で展示します。

これらの展示をとおして、美しい豊かな県土の大自然に親しみ、自然保護と開発の調和を考えたいと思います。



大地のおいたち

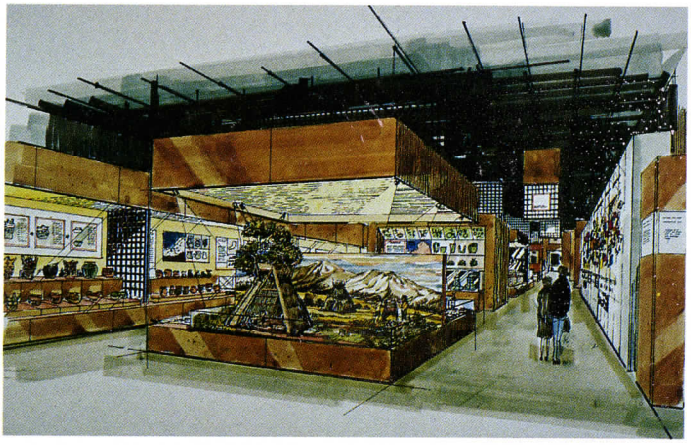
1　われらの祖先
2　中・古生代
3　新生代

歴史展示の導入路にあたり、続く考古展示の理解を助ける役目をもっています。そこでここはスタティクな静寂感をもった空間をかもしだし、タイム・トンネルのような雰囲気を表現します。

「われらの祖先」では生命の誕生と進化を概観するため古生物の立体模型を示します。

「中・古生代、新生代」では、当時の日本列島周辺の古地理図を中心におき、県内の主要な岩石・鉱物とともに化石の標本を展示します。特に化石は、各地質時代の主要な学術的価値の高いものが展示できるよう努力を続けるつもりです。

～歴　史～



越前・若狭の あけぼの

1　けものを追って
2　土器をつくる
3　米をつくる
4　古墳はかたる

緑濃く連なる山並みを望んで、肥沃な平野が広がる越前。水清らかな若狭の海。この「越山若水」のふるさとに繰り広げられた人々の営みの跡をたどり、変わりゆく郷土ふくいのあゆみを展開します。

まず、日本列島が大陸と地続きだった氷河時代のきびしい自然環境の中で、狩りをする人たちの生活を探ります。やがて気温が高まり、海進が始まります。この頃人びとは土器を作り始め、石器は一層精巧になり、それらの種類を増していきます。出土する装身具や呪術具などは、彼らの精神文化の高まりを想起させます。続いて大陸から稲作と金属器が伝わり、階級差が生じます。その後本格的な古墳時代をむかえて、越前・若狭は北陸の中で最も栄えます。

これらのことを、近年の発掘の成果をふまえて展示します。中心展示の縄文時代の詳細な住居復元模型や弥生時代の集落復元模型などは、身近に感じられ興味をもたれることでしょう。また展示されるさまざまな考古資料の中に先人達の知恵を感じ取ってほしいものです。

古代の越前・若狭

1　越の大国
2　古代寺院と古瓦
3　くらしのあと
4　荘園のはじまり
5　海の道～大陸交渉と海上祭祀～

律令時代の越前・若狭両国の政治や経済・文化は、前代にくらべてより一層強固になった中央との結びつきのなかで、様々な展開を見せました。地方の豪族たちは古墳に代って私寺の建立を始め、壮麗な伽藍が出現しました。越前では、四分法という大和と同じ条里制が施行され、東大寺の大規模な荘園もおかれます。一方若狭は、都で消費する塩の重要な生産地で、それは藤原京・平城京で出土する木簡からも窺えます。また、敦賀松原に渤海使節を饗する客館が設けられたように、大陸文化に対しての玄関口でもありました。展示ではこういった事象にまつわる遺跡・遺物を紹介していきます。

仏教のくに

1　幽玄のみほとけたち
2　浄土への憧景
3　白山への祈り
4　経を埋める
5　道元禅師
6　真宗の展開

6世紀に伝えられた仏教は、わが国の政治・文化・社会に非常に大きな影響を与えてきました。ここでは、平安から室町に至るまでの本県に関係する仏教の姿を追ってみたいと思います。平安時代最澄と空海によってもたらされた密教は数多くの神仏を登場させることになりました。死後の救済を説く浄土教は平安後期以降盛んになり、また古代からの山岳信仰と密教が習合した白山信仰は平安末期に成立したと考えられています。鎌倉時代に入ると道元禅師が永平寺を開き、真宗の発展は室町時代を待って、みることができます。さらに平安から明治に至るまで人々の信仰の対象として経典を地中に埋める埋経も行なわれてきました。このように多彩な内容をわかりやすく展示していきたいと思います。

中世の越前・若狭

1　武士の戦い
2　越前朝倉氏と若狭武田氏
3　中世の農民たち
4　一向一揆

中世の越前・若狭は、まさしく戦乱に明けくれる時代でした。源平の戦いにおける義仲軍と平家軍の燧ヶ城での戦いに始まり、織田信長が越前・若狭を平定するまでの間、数々の戦いがくり返されました。

ここでは、源平の戦い、南北朝の争乱時における新田義貞の動き、下剋上の世に一躍戦国大名となり越前を支配した朝倉氏と若狭を支配した武田氏との戦い、さらにはこの時期に急速に勢力を伸ばした一向宗徒による一向一揆までを展示します。一方、戦乱に明けくれる中、農民のくらしはどうであったのか、曽万布遺跡をもとにその姿を追ってみます。

近世の越前・若狭

1　柴田勝家
2　若越諸藩
3　城下町
4　街道をゆく
5　越前・若狭と日本海海運
6　農民のくらし

長い戦乱の世を統一に向かわせた信長、秀吉に続いて徳川家康が江戸に幕府を開くと、以後二百数十年にわたって江戸時代が展開されます。越前・若狭も北国の要所として、柴田勝家らの支配の後、結城秀康、京極高次らが封ぜられました。強力な幕藩体制のもと、城下町、宿場町、湊町などでは町人の盛んなにぎわいが見られ、他方、農村ではたび重なる飢饉、圧政に苦しむ農民の姿がありました。展示では福井の城下町模型を中心に据え、町のくらし、村のくらしを展開していきます。

近代の福井

1　幕末の越前・若狭
2　教育の振興
3　変わりゆく郷土
4　戦火と震災

開国、維新の激動期を経た日本は、欧米先進国に追いつくため急ピッチで近代化を進め、ついには大陸進出をめざして戦争へと突入しました。福井県においても繊維工業の発展、教育の振興などに力を入れましたが、やがてむかえる戦争・震災の痛手は大きく、一からの出直しが始まったのです。展示ではこのめまぐるしく変貌する近代の流れを追います。

ふるさとの今

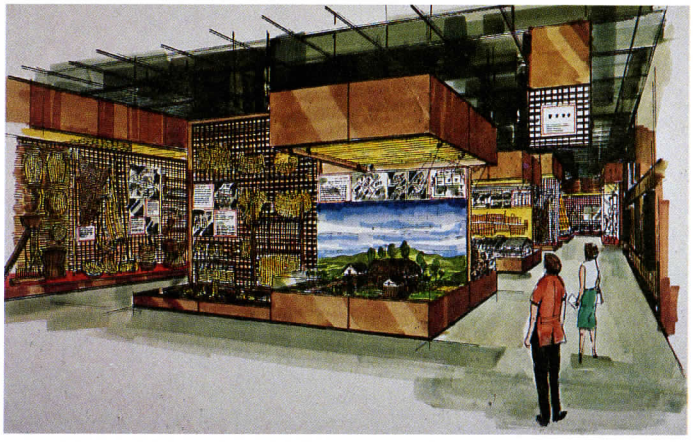
福井県下の人々の生活やそれをとりまく環境など、福井の今の姿を映像によりありのままに紹介して、観覧者のさまざまな感慨にゆだねます。

～民　　俗～

くらしと生業

1　仕事着
2　住い
3　稲を作る
4　手工
5　ナギ(焼畑)と雑穀
6　山のめぐみ
7　武生の刃物鍛治
8　海の漁

福井県は比較的狭い県域ながら、自然の変化に富み、また隣接する諸地域との交流をとおして、地域ごとに変った生活が見られます。「生業」の展示ではこうした多様性と、困難な条件を克服してきた先人の努力を示します。テーマは多くの人が従事したも



の、文化的に重要なものをとりあげました。現在福井県では民具の調査収集はたいへんおくれていますが、ここでは民具の意味の紹介もあわせておこないます。

「住い」の項目では4基の民家模型を展示します。これは単なる建築模型ではなく、家と仕事や自然環境との関りあい、家と家との関係、民家のもつ美しさがわかるような工夫がなされています。

信仰と祭

1　清浄とけがれ
2　よりしろ
3　火
4　そなえもの
5　祭の芸能
（シンボル）

「くらしと生業」では「ケ」の部分の展示をするのに対して、ここでは、祭や年中行事、さまざまな人生の儀礼などの「ハレ」の部分を示します。また、それらの根底にある「信仰」も扱います。

日本の日常の民具は彩色がなく一般的に地味ですが、ハレの機会に用いられるものはいろどりもあざやかで形も複雑です。ここでは個々の行事や儀礼をばらばらに紹介するのではなく、行事や儀礼を構成する有形の「もの」を、性格によってわけて展示し、日常のくらしとの違いがわかるようにします。

～産　　業～

（織物・めがね・伝統工芸）

織物とめがね

1　越前絹のおこり
2　羽二重の全盛
3　くらしをささえた織物
4　人絹王国ふくい
5　合繊織物の発達
6　シンボル展示～織機のいろいろ～
7　ふくいのめがね

福井県の産業の中から、繊維産業とめがね産業をとりあげます。

特に、羽二重、人絹、合繊と3度の転換期を乗り越え、そのつど全国一の産地を出現させた繊維産業は、まさに福井の近現代をささえてきたと言えるでしょう。

ここでは、原始、古代から現代に至る「織物王国福井」の歩みを、羽二重の時代、人絹の時代を中心として展示する他、くらしをささえた織物のコーナーでは、麻、木綿などの自給自足の機織りの様子についても触れます。

また、一農村の家内工業から発達して全国一の産地にまで急成長しためがね産業についても、その成立と展開の過程を簡単に紹介します。

技を伝える

1　若狭塗
2　若狭めのう
3　越前打刃物
4　越前漆器
5　越前焼
6　越前和紙

福井の伝統工芸として上記のものをとりあげ展示解説します。各項目は基本的に工程、工具、製品の由来を挙げ、総合的に理解してもらえるよう考えています。全国に数多い伝統工芸と比べそれぞれの特色をも説明したいと思います。例えば若狭塗は意匠に特色があり、若狭めのうは発色技法が秘伝となってきました。また打刃物は刀工が伝えたもので、越前漆器は堅牢さと華麗さを特徴とし、越前焼は鎌倉・室町時代に栄えたという歴史、越前和紙は歴代政権に献上されたという具合に興味深いものです。

博物館準備を支える２つの柱

建設準備委員会

県立博物館建設準備委員会は、「県立博物館の建設に関し、その基本構想の策定その他必要な計画等について指導助言を得るため」に設置されています。現在委員会は９名の専門的な知識経験を有する方々で構成されています。

委員会では、博物館の建設準備に関する諸問題を検討していただいておりますが、特に常設展示の内容については細部に至るまで討議していただいております。また、文化施設の中核としての県立博物館の果たすべき役割はどうあるべきかなど、根本的問題も提示され、今後の運営の基本的事項も多面的に検討がなされています。

以下、委員の紹介を簡単に述べたいと思います。

塚野善蔵会長（福井大学名誉教授）　専門は地質学です。博物館のあり方を中心に「博物館の哲学」はいかにあるべきかという本質的な提言をされています。委員会の舵とり役として積極的かつエネルギッシュな会長さんです。

野村英一副会長（県文化財保護審議会委員）会長の補佐役として委員会の舵とり役のお一人です。その温厚な性格と卓越した学識がかもしだす雰囲気は御発言の内容を一層説得力あるものにします。

西川新次委員（慶応大学教授）　武生市の御出身です。専門の美術史では全国的に高名なことは周知のことです。温和な発言の中にも、造詣の深さが窺えます。

杉原丈夫委員（県立図書館長）　民俗学を中心として巾広い意見を述べられています。

渡部貞清委員（福井大学工学部教授）　展示と建築の調和を重視された発言をいただいています。

宇野沢利勝委員（福井市教育長）　前会長として、準備委員会を軌道にのせられました。

三上一夫委員（前県教育研究所長）　近世史、近代史を主として多くの発言があります。

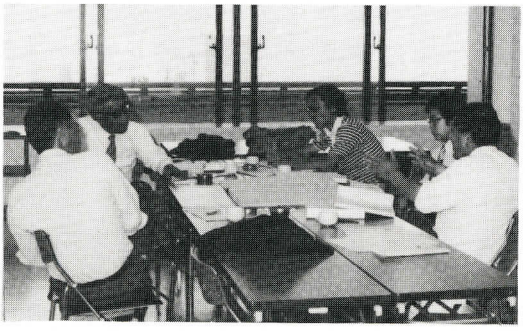
白崎昭一郎委員（医師）　造詣の深い古代の分野では特に核心をついた意見を出されています。

加藤敏雄委員（前県繊維工業試験場長）　繊維の展示を中心とした教示をいただいています。

資料調査委員

県教育委員会では、「県立博物館資料調査委員」20人を委嘱し、県立博物館の準備活動をすすめています。資料調査委員は、博物館の資料やそれに関する情報の収集を円滑にすすめ、展示やその他の博物館活動について意見を求めることを目的におかれました。委員には、自然、考古、歴史、美術工芸、民俗、繊維産業の各分野から、長年にわたって県内で活躍されている方々にお願いしています。

資料収集に関する委員の活動を少し詳しく御説明します。これまでの各方面の調査、研究の結果、資料の所在はかなり詳細にわかっています。資料の収集は、信頼関係のうえにできるものです。ところが県立博物館は建築工事が本格化したばかりで、十分な理解がされているとはいえません。博物館の資料収集は、地元で長年にわたって調査研究をし、信頼関係を作りあげている調査委員からの情報により、



あるいは調査委員に同行していただいてすすめています。博物館について資料所蔵者や一般県民の理解を得るうえで大きな役割をはたしています。博物館準備室の職員はそれぞれ専門の分野をもって活動していますが、こうした委員の御協力により、適格で効率のよい資料収集活動がおこなわれています。

57年度の委員は次の方々です。（敬称略）

（自然）伊藤一康、安野敏勝、竹山憲市、（考古）水野九右ェ門、木下召乙、松井政信、（歴史）天野俊也、斉藤喜美、伴五十嗣郎、杉本泰俊、（美術工芸）武藤正典、斉藤光夫、（民俗）藤本良致、小林一男、朝比奈威夫、宮腰健夫、金田久璋、（繊維）深谷外夫、諸新平、吉川博夫

収蔵資料の一部から

ビカリヤ　（受贈資料）

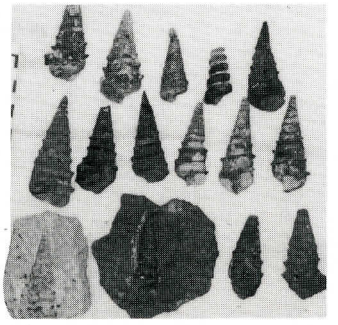
Vicarya yokoyamai TAKEYAMA

福井市鮎川町・三本木町産出

大飯郡高浜町鎌倉産出

新生代中新世

竹山憲市氏・中川登美雄氏採集



福井県からビカリヤが初めて報告されたのは、昭和8年京都帝国大学の竹山俊雄氏によってである。ビカリヤは、中腹足目、ウミニナ科に属する。ビカリヤの特徴は、殻表に大小の棘（きょく）状突起が顕著にみられることである。熱帯～亜熱帯の内湾棲の種属で日本の中期中新世から多産する。

鮎川の海岸は古くからよく知られた産地であるが、昨年高浜町鎌倉や福井市三本木町から道路工事に伴って保存の良い標本を多量に採集することができた。この中でも、鮎川産の標本は化石の殻が炭酸塩鉱物のアラゴナイトに置換されており実に美しい標本である。ちなみに、塩酸で殻を溶かしてみると、内部が珪酸で置換された「月のおさがり」様の標本もまれにみられる。（東）

室谷廃寺の心礎　（受贈資料）

奈良時代後期

長径 148cm

短径 115cm

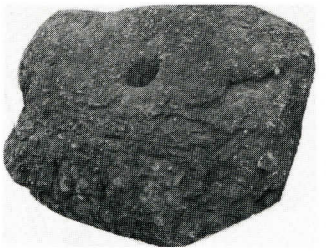
厚さ 80cm

重さ 2.2t

今立町室谷

武安喜三郎氏

寄贈



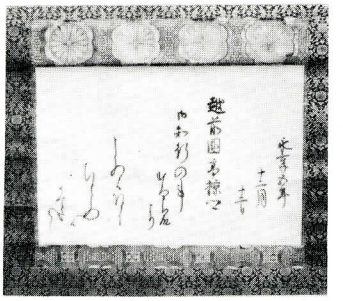
室谷廃寺跡は、今立町室谷区の畑地（現在は水田）にあり、昭和35年開田の際に心礎や鉄製の宝珠・水煙・釘、並びに須恵器・布目瓦が発見されていたことが今立町誌編纂中にわかり確認されたものである。

心礎は、背後の山に産する扁平でほぼ四角形の岩石（輝石安山岩）を利用し、その中央部に径16cm、深さ12cmの枘穴が穿孔されている。柱根の接した面は変色し、心柱の径が約60cm位であったことがわかる。塔の高さは、心柱径の約40倍との説をとれば、約24mとなり五重の塔であったと推定できる。

奈良時代、服部郷に属したこの地に、古代寺院の存在する事実は、当時有力な在地豪族の存在したことを裏付ける。本資料は、越前における数少ない古代寺院の心礎の一つで、貴重なものである。（青木）

後花園天皇宸筆御書状　（贈入資料）

本資料は、後花園天皇自筆の綸旨で、内容としては、越前国高椋郷の知行に関するものである。高椋郷とは坂井平野の東南部、現丸岡町の一部に比定される。「看聞御記」（応永23年から文安5年にわたる伏見宮貞成親王の日記）の同年同月の記事に、高椋郷の知行主が入江氏になったとあり、また、文中の「むろまち殿」が、永享5年の日付より、足利義教をさすことから、幕府・朝廷間に高椋郷の知行についてやりとりがあったことがうかがえる。なお、本資料と体裁も文章もよく似ており、同年同月同日付の熱田神宮宛の書状があるが、これは国指定の重要文化財となっている。

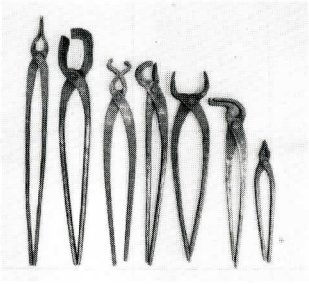


以上の点から、本資料は貴重な史料である。

（山形）

農鍛冶のはし　（受贈資料）

南条町東大道　梅田仙太郎氏寄贈

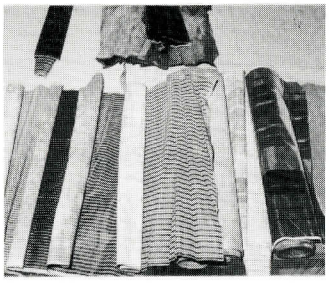


最近まで村々には地元のもとめに応じて農具などを作ったり、修理したりする農鍛冶がいた。はしは鍛冶屋が用いる基本的な工具の一つであるが、大きさや形の違う製品にあわせるため、形が変化に富み、鎌や包丁を専門的に作る刃物鍛冶とは大きな違いがある。

梅田仙太郎氏は、昭和９年から57年２月まで農鍛冶をしてこられた。鍬や、鉄道保線用のつるはしなども作ったが、斧（よき）は特に評判が高く、その材料の選び方、用い方は専門書にも紹介されている。廃業にあたり梅田氏は用具一式、250点余を県立博物館へ寄贈された。写真のはしはその一部である。一人の農鍛冶が使った用具の一式がそろっており、たいへん価値の高い資料である。（坂本）

有線ビロード織物　（受贈資料）

遠敷郡上中町大鳥羽



遠敷郡上中町大鳥羽周辺で織られていた有線ビロード織物は、大正６年に森下嘉太夫氏らが発起人となり、滋賀県長浜から技術を導入したのがはじまり。

大正10年には30工場（織機約 150台）にまでふくれあがり、地場産業として定着した。

第２次大戦後も、好不況の波の中で生産をつづけ合繊の時代とともに一時活況を呈したが、用途の主力である鼻緒（はなお）の需要低下から、昭和40年を境として先細りの傾向となった。

現在は、１～２の業者が、細い繊維を使った特殊技術を生かして、女性の髪用クリップを手がけているのみであり、有線ビロード織物の製織は途絶えている。（橋脇）

資料の収集に御協力を！

資料の収集活動は博物館の生命です。県民ひとりひとりがつくる博物館を目指して、準備室では次のような資料を皆さんから求めています。

- 自然…動植物や化石、岩石、鉱物などの標本。
- 考古…石器、土器、青銅器、鉄器、埴輪、古瓦、古鏡、経筒など。
- 歴史…古文書、古絵図、古地図、古写真、絵画、甲冑、刀剣、仏像、仏画、仏具、など。
- 民俗…仕事着、ハレ着、飲食用具、田畑の用具、漁撈用具、年中行事の飾り、芸能の楽器。

その他、繊維産業、伝統工芸に関するもの。

収集は、所有者や地元の意向を尊重しながら、寄贈・寄託及び購入等の方法で進めていきます。

これらの資料の提供、あるいは所在などの情報を大小にかかわらずお寄せください。お待ちしています！

７月に入り、雨がじとじと降り続くはずが、今年はなぜか空梅雨もよう。乾いた土は精いっぱい水を吸収しようと待ちかまえている。

今の我々にとって、博物館を創造することは、さまざまな情報を最大限に吸収し、活性化すること。空梅雨の土のごとく、貧欲に。貧欲に。

ふくいミュージアム　No.2　1982.7.1
編　集　福井県立博物館建設準備室
発　行　福井市大手３丁目17－１（〒910）
福井県教育庁文化課内
☎ 0776－21－１１１１ ㊥ 4223
印　刷　出口印刷株式会社